

---

# キライキライもスキのうち

亀山

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キライキライもスキのつち

### 【著者名】

亀山

N9588Q

### 【あらすじ】

チヨコレート嫌いな女性のバレンタインの話

「え・・・」

「じめん、そのチヨコレートは受け取れない」

がらがらと体が崩れたような気がした。ポトリと落ちたのは昨日一生懸命作った歪なチヨコレートか。

そのつてなんだ。あんた他の女子からきやいきやい言われながらチヨ「」を受け取ったのに私のは受け取れないのか。受け取れない理由があるのか。・・・私が嫌いだからか。そういういたいのに口が震えて言えない。体が動かない。

なんか言わなきや。動かなきや。だつて相手も困つてゐる。口を開いて、声がうまく出なくて、馬鹿みたいに赤くなつて。

「ひつちもあんたにあげようと思つたんじゃないからー何思いあがつてんの?」

最低な言葉を吐き捨てて私はその場から逃げ出した。チヨコレートも、あいつも置き去りにして。

スキがキライになつた、高校一年生の冬。

その苦い記憶から10年たつた。世間はバレンタインデー。相変わらずチョコレート会社の陰謀に振り回されてる人々はたくさんいるらしい。ここにまで同僚がきやうわやうと姦しく田井の人に田井配せなんかしている。いいから働け。

私はその光景を尻田に自分のデスクに腰掛け、パソコンの画面とにらめっこをしている。

30手前になつて焦りがない、というわけではないが、このような行事ではもう痛い目にあつている。

ずずつと苦いコーヒーをすすつて定位置からずれた眼鏡をぐいとあげる。

ここ最近パソコンの画面ばかり見ているせいか、視力が落ちてしまつた。また眼鏡屋さんにいかないと。コンタクトは恐ろしくてとてもつけられる気にはなれない。

目が疲れ初めて私は眼鏡を取つて田井をこすりつとして止める。そうだ、ここは自宅じゃない。化粧をしているんだつた。

かゆいところをこする誘惑を抑え、私は変わりに田井を閉じた。ジワリと涙が出てきて田井を癒そうと働き始める。ああきもちいい。

「せーんぱいっ 疲れました？ 疲れには甘~いチョコレートですよ？」

耳に甘い声が突き刺さつた。そしてふつんと匂ひをうに甘いチョコレートの香り。田井を開けると田井の前に茶色いココアパウダーがまぶ

された甘やうな生チョコレート。」丁寧に可愛いプラスチックの楊枝までついている。パッケージは赤と茶色で高級そうだ。

世の女性だつたら目を輝かせておいしそうとほほ笑むだろう。けど私にとつては目の毒でしかなかつた。

「私、チョコレート嫌いだつていつてるでしょ？いいからだけないよその箱。チョコレート臭い」

「それはあんまりですつて。チョコレートの美味しさを知らないなんて人生の半分を損します。ほら、これなんてわざわざ銀座までいつて行列に並んで獲つたとつておきの生チョコレートですよ？ほらほらほら」

思いつきり渋い顔をしたのにチョコレートを近づけるのは私の高校の後輩にあたるらしい同僚の畠山だ。たまにこうやって私を先輩と呼ぶが絶対からかっている。

こいつが大のチョコレート好きで何かあると周囲にチョコレートを押し付ける。嫌いだといつている私にさえ容赦はしない。毎回撃退はしているが。

いい仕事をするのにこうこうとこりがダメなんだろう、なかなかのイケメンなのに彼の周りに女の影はない。・・・遠くから見てるいじましい影はあるが。

「ええい近づくな！課長！課長！助けてくださいよー。セクハラですセクハラ！」

「またまた仲いいねえ。おじさん嫉妬しちゃうよお  
「課長もうちょっと状況を的確に判断してください」

ほつほつと笑う課長は私のSOSなど気にも留めずこちよつと総務課まで行ってくるよと華麗にスルーなさりやがつた。後でお茶がどうなつても知らないぞ。せいぜい思いつきり噴きだすがいい。

それはともかく今はこの状態をどうするかだ。やつはいい笑顔で一人と言いながら楊枝の先につけられたチョコレートを私の口に押し付けようとしている。なんという羞恥プレイ。職場である行動ではない。というかその邪悪なものを私の口の中に入れようとするな！

誰か助ける、と祈るよつた気持ちでドアの方に視線を動かすと見えた救いの神。

「畠山あ？なにやつてんのあんた。私の木田ちゃんに手えだすんじやないわよこのはすつといどつこい」

「げ・・・三島さん・・・」

「三島さん・・・」

「げ、じゃないわよ。何？また木田ちゃんいじめてたの？あーよしよし怖かつたねえ人の嫌がることをやるなんて全く小学生があんたは」

私は思わず救世主に抱きついた。私の頭を抱いてふん、と鼻を鳴らす三島さんは30越えでも独身でバリバリ働くキャリアウーマンだ。一般社員であるにも関わらず下手したら課長よりも権力はあるかもしけれない。

そのさつぱりとした性格は男女区別なく好かれ、頼られている。そして面倒見もよく、私もよくお世話になつている。その分呑みに付き合わされることが多いのだが。

そんな彼女の唯一の欠点はと言えば・・・

「今日もパツド・・・」

「木田ちゃん？ちよつとあとでお姉さんとお話ししようかしらあ？」

「すみませんなにもいつてません今日もスタイル抜群で！」

「よのしこ」

恐ろしい笑顔を顔面に張り付けた三島さんはやがてお仕事に戻りなさいと私の頭を小突いた。  
そして課内を見渡して顔をしかめる。

「課長何処行つた？」

「ああ、課長なら総務課に行くと言つて出て行きましたよ？」

「逃げたかあの親父……！」

この書類に課長のサイン貰わないといけないのに…と三島さんは女性がするものではない物凄い顔で舌打ちを擊つとむんずと突つ立つていた畠山のスーツの首筋をつかむ。

畠山は慌てて反抗するが、振りほどけない。

「ちよ、三島さん…何するんですかっていうか俺を何処につれいくつもりですか！？」

「決まつてんじゃない、あの狸親父捕まえる旅にでるのよ。こんな美人と二人旅なんてそうそうないわよ？付き合いなさいよ…」

「いや俺はもうちょっとグラマーな方が好みでして…」

「なんか言つた！…！」

ひいいいいいつてませんんんと売られる子牛のような目をして引きずられて行く畠山を私は笑顔で見送つた。わああみる。

さて仕事に取り掛かるうとした私はデスクに先ほどの生チョコレートが乗つているのをみてまた顔をしかめた。

我ながらずいぶん昔のことを女々しく抱え込んでいるものだと呆れるが、10年前のあの時以来私はチョコレートの甘つたるさを好みのものには思えなくなつた。

とこうかはつきりいおう。大つ嫌いだ。

この世の中で一番嫌いなものは？と聞かれたらチョコレートだと断言できる。

甘いものが嫌いになつたわけじゃない。ケーキも好んで食べる。

そう、ただチョコレートが嫌いなのだ。チョコレートだつたら力才オ85%でも100%でも駄目。まあそこまでいくと苦すぎて普通に食べられるものではないが。

だからこそ畠山の存在は憂鬱でもあり、憂鬱でもあり……憂鬱だ。誰だつて嫌だらう、とても嫌いなものを毎日毎日人の鼻先に持つてきてさあ食べると急かされるのは。キレてもおかしくない。いじめなのか？と悩んでもいいこりの合いだらう。

「・・・・・」

そこまで考えて私はその生チョコレートの箱をぽいと畠山のデスクに放り込んだ。チョコレートは幸い零れることなくデスクに落ち着いたがココアパウダはそうはいかないだらう。綺麗に整頓されている畠山のデスクはうつすらと茶色に染まつた。

わかってる。私が勝手に嫌つてているだけでチョコレートは悪くない。世界中の人から愛されるチョコレートなら「嫌われてる？まあそういう人もいるだらうさハハッ」と懐深く許してくれるだらう。そんなチョコレートがいたらの話だが。

それに畠山もいらつとくることはあるが、本人には悪気はない……いや、あるな。

さつきチョコレート片手に迫ってきた畠山の良い笑顔はなかなか忘れられない。ネズミをいたぶる猫の様な、虫の羽をむしる無邪気な幼子の様な……だつたのかあいつ。

そうじやなくてえーと……なんか憎めない。そう、そんな感じ。

本気で嫌だと言えば引きさがつてくれるし。無理強いはしてないし

たぶん。

・・・いやこやこやこやなんで畠山の「と自分で自分で弁明してるのはよ私。

しつかりしなさこよ木田 美保!今先決すべきことはいかに迅速にこの仕事終わらせて今日の同窓会に出るかってことでしょう?時刻はまだ毎前ではあるけど、膨大な量の仕事は減りそうにない。頑張つて定時に終わるか終らないかのどちらかだ。一応残業は免除されているが今日の仕事を明日に持つていくところのは自分だ。それは嫌だ。もう徹夜できるほど若くはない。

でも今日の同窓会あいつも来るんだうつな・・・ふと思ひ出してタイプする手が止まる。

夕焼けの教室。嬉々としてチョコを受け取っていた顔が無表情に言った言葉。・・・思い出したくない。でも会つてみたい。その一念があつて散々迷いながらも出席の文字に を書いた。

友達に久々に会いたいのも本当。懐かしい面々と話したいのも本当。でも遠くから彼の姿をちらりと見てみたくて今日とこいつ日を憂いと期待 3:1で待つたのだ。

ああ女々しい。そんな気分を洗い流したくて苦いコーヒーをぐいっと呷おうとした・・・のだが、口の中に広がるあのさわやかな苦みが感じられない。

あれ?と思って湯のみの中を覗き込むと見えるのは白い陶器の壁に表面張力のためはりつく茶色い液体少々。どうやら考え方している間に全て飲み干してしまったようだ。

仕方ない、と私はテスクを立つて課内に備えてある給湯室へと歩き出した。

「あ、木田さん」

「ん？あれ、斎藤ちゃん？何やつてるの」「ソード」

給湯室には先客がいてコーヒーを淹れていた。えへへ、と困ったよう  
に笑う彼女は斎藤由美といつ隣の課の子だ。清楚で可愛らしこ  
子で少し引っ込み思案なのが玉に傷。そんなにいとも可憐このだけ  
れど。

うちの課の給湯ポットが壊れちゃって、とは言ひがせりと畠山田当  
てだり。せりき語りしていた畠山を見守るごじましご豎とこいつのが  
何を隠かづの斎藤ちゃんである。

「畠山なつむりせりき島わさに連れられしほりの課長を探す旅に出か  
けたわよ？」

「いや別に畠山さんのことは聞いてなくつて……」

「本当課長つたらすぐびっかに消えて別の課また別の課つて会社中  
歩き回るんだから・・・携帯も繋がんないし。あれ絶対面白がつて  
やつてると思うんだけどじうよ？」

「えーと・・・困った課長さんだね？」

斎藤ちゃんは真っ赤になりながらも首をかしげて見せる。ああかわ  
いい。

うちの課の男どもが彼女が来るとはしゃぐわけだ。畠山だけは通常  
営業だが。あいつの日は節穴なんじやないかとわりと本気で思つて  
いる。

つい抱きしめたくなる衝動を抑え、何事もなかつたかのように私は  
会話を続ける。

「いいよねえそつちの課長は。有能で冷静。部下がミスしても綺麗にフォローしてくれるなんて理想の上司じゃない。私そつちに行きたかったー」

「表情があまり変わらないのがおしいけどね」

「そうそう、いやでも表情いろいろ変わつて『ノリノリ』『ケーション』能⼒抜群でさらに有能だつたら羨ましくつて刺しあやう人が多発するかもだからそれでちょっとどうじいかも? そのクールなところがいい! っていう人もいるらしいしね」

「・・・課長人気だつたんだ・・・」

「うん? まあ綺麗な顔してるしね。私は上司として欲しいけど」

ちやつかり斎藤ちゃんが淹れたコーヒーを貰つてずずっと音を立て飲む。ああ人に淹れてもらつたコーヒーってなんでこんなにおいしんだわ!。

コーヒーの余韻に浸つてる私を見て飲みすぎるとよくないよと可憐な注意をしてくる斎藤ちゃんに「ごめん」「ごめん」と謝りつつ、私は腕時計を見てゲット声を上げた。

「やっぱ、早く仕事やらないとー」「めん、斎藤ちゃん。私戻るね!」

そういうおいて湯のみと共に席に戻ろうとした私をせき止める、待つてという斎藤ちゃんの声。

何事かと振り返ると斎藤ちゃんが真っ赤な顔で上目づかいに私を見つめて来た。何という兵器。私じやなかつたら即死だぞ即死。主に鼻からの大量出血で。

斎藤ちゃんはそのままついつと田を逸らしながら震える唇を開いた。

「あの・・・ランチ一緒しません?」

YES以外の言葉を貴方は言えますか。いや言えまー。

昼休みになつても三島さんたちは戻つてこなかつた。課長探しにずいぶん手間取つてゐるのだろう。

自分のデスクを離れた私は隣の課で斎藤ちゃんを拾つて地味だけどうどんがおいしいことで有名なそば屋に入つた。

・・・そばも頑張れよ、と思うが主人が前勤めていたのがうどん屋だつたといふのだから仕方ない。

私は山菜うどんを、斎藤ちゃんは円見うどんをそれぞれ頼んでゆつくりとお冷を口に含む。

氷がはいつていなその水はそばやうどんを茹でるときにも使う名水だそうで喉腰がやわらかい。氷が入つていたらこの柔らかさも硬化してしまうだろ。主人がそれを考えて氷を入れていないので、それともただの怠慢かは私には判断がつかないが。

斎藤ちゃんは先ほどからそわそわと鞄を抱えながら落ち着きなくあたりを見渡している。

うどんが来るまでの間に雑談を試みるが上の空でしきりですね、と生返事をするばかりだ。

うどんが来てからもするばかりで沈黙が痛い。けれど今までの経験から察するに色々考えをまとめている最中なんだろう。私はゆっくり待てばいいのだ。・・・いくら暇でも。

私が先に食べ終わつて追加に頼んだ白玉あんみつが来てぱくついてからも沈黙は続いた。

斎藤ちゃんが口を開いたのは私が楽しみに取つておいた白玉を食べようとした瞬間だった。

「あの・・・」

「ん？ やつと話す気になつた？」

「うそ・・・私、今日皆山に会ひゆつて廻つた」

ポロリと白山が氣のスプーンから転げ落ひて器におさまつた。なんだ私は昔から驚くと物を落とす傾向にあるのかつてやうつとまで。

「皆山？」

「いや、は、は、煙山君じやないからー。」

「はいはいわかつてるわかつてる。え？ なんで急に？」

わかつてない、と顔に真っ赤にして口を尖らせながらも斎藤ちゃんは握りしめていた白い鞄から赤い包装紙に包まれた箱を取り出した。はこびつても本命チョコレートです本当にありがとうございました。

「こんな行事のときでもないと、勇氣だせないつて思つて・・・」

いくじなしだね、私、と真っ赤になりながら落ち込んだ様子の斎藤ちゃんを私は首を横に振つて励ました。

「そんなことないつて。斎藤ちゃんはもし振られても煙山のこと嫌いにならないでしょ？」

「だから煙山君じやないつて・・・」

だから「わははもう知つてるつて。〇一の噂つていつ情報網なめるんじやないわよ斎藤ちゃん」。

とはいえ否定する斎藤ちゃんがかわいいので口にせぬ。

「少なくとも何かに当たるとかしないでしょ？」

「・・・人の迷惑になる」とせやつかやいけなにって言われて生きてきたからね

「それで十分。勇気はあるよ」

私よりもよほどたくさん。

そうかな、と少し自信をもつたような斎藤ちゃんとにやうだよ、と頷き返して私は白玉をもぐもぐと頬張った。もちもちとした食感がおいしい。

会計をして店を出ると思いのほか寒く、ぶるりと震えた。  
暖かいうどんを食べていたときにかいた汗も体温を下げる」とを協力してくれている。

斎藤ちゃんと二人して寒い寒いときやあきやあ笑いながら帰路を急いだけれど私の胸は冷たく凍えていた。

急に冷たい空気を肺に直接取り込んだのが悪いんだと自分に言い聞かせた。肺はじぐじくと痛んでなんだか嫌な気分だった。

廊下で斎藤ちゃんと別れて課に戻ると三島さんと畠山が戻っていた。  
課長はいない。まだ出ているのだらう。  
いやわかぐつたりとしている一人に同情してコーヒーを入れてやる。  
三島さんは弱弱しい笑顔でありがとうと「コーヒーを受け取つてすつた。

「ねえ課長どこいたとおもうへあひかけ渡り歩いて結局総務課にいたのよあの親父。そのあと追いかける私達の身になつてほしいわよね全く」

「まあまだ近くでよかつたじゃないですか」

「そりやね・・・ああ仕事やんなきや・・・」

ふう、と息をついた三島さんは「あやつね、とかツップをまた盆の

上に置いた。そして伸びをするとパソコンに取り掛かる。

次に私がコーヒーを運んだのは畠山。コーヒーだけおいてさつと三島さんのカップを洗おうと給湯室に行きかけたら服を掘まれた。

ちつ

「何よ?」

「何よ? ジヤあつませんよせんぱい。俺のチョコレート、蓋閉じないでデスクに放置しないでください。お陰でデスクが茶色です」

「いいじやないパソコンも書類もなかつたんだから」

「もうですけど疲れて戻つたらデスクが茶色いって何の嫌がらせかと思ひますつて。雑巾で拭きとれるものだつたから良かつたですけど」

「まあまあコーヒーでも飲みなさいよ、ミルク入り」

「・・・ブラックで砂糖少々が好きなんですけど」

「気にしない気にしない」

恨めしそうに言つ畠山をスルー・・・しようとしたけれど相手は結構手こわかった。「コーヒーを勧めてはみるが流されない。どうやらコーヒーの淹れ方を間違えたことで余計に機嫌を悪くしたようだ、チョコレートも少し溶けてしまつたなどとぐちぐちこつてくる。あめんびくさい。

「ちょっとといい加減放しなさいって。これ洗つて仕事に取り掛かんなきやいけないんだつてば。早く帰りたいし」

「・・・せんぱいなんか予定ありましたっけ?」

「同窓会よ同窓会。高校の

「ふうん」

ぱっと呆気なく服が放された。とめちやつてすみませんと顔をそむけて畠山が言つ。

いつもだったら何が突つ込みそつなもんだけどはて?と思ひながら私はさうと給湯室に行って流しにカップを置いてきた。  
どんまい、と三島さんの声が聞こえたが誰かがミスでもしたのだろうか。

私には関係ないことだらうと私はさうとテスクに戻つてまたパソコンとのにらめっこを始めた。

5時。定時だ。どうにか仕事は終わつて私はバタバタと帰り支度を始めた。早くしないと5時20分の電車に間に合わない。

「じゃ、先あがります!」

そう課内に声をかけるとあちこちにおーひやうお疲れーやういう声が上がる。だが畠山の声はしない。自分のテスクで何か作業をしているよううだ。

あの後畠山は私の仕事の邪魔はしてこなくて、そのおかげで随分早く終わつたんだけれど・・・怒つてる?  
さすがにデスクに生チョコレート放りこんだのまずかつたかな、と思ひながらも時間がないから扉を開ける。

すると田の前にいたのは斎藤ちゃん。危うく勢い余つておでこをこつこつこするところだつた、あぶないあぶない。

「あ、木田さん」

「おつと斎藤ちゃん。ごめん私急いでるのじゃあね!」

そのまま駆け出した私に向かつて斎藤ちゃんが頑張るからーと言つたのが聞こえた。廊下は寒い。また肺がじくりと痛んだ。

同窓会の会場は居酒屋だった。ほど暗い照明やらお酒やら味付けの濃い料理やらとなかなかに盛り上がり、みんな中々に楽しんでいるようだつた。

「美保本当久しぶり！10年ぶり？」

「馬鹿。もうちょっと長じつてねえ？」

「本当本当。もうこうして会えるなんて思わなかつたよー 美保呼

んだ武田マジグッジョブ！」

「マジとか今の私達が使つてもアレだつてー」

楽しそうに話すのは私の友人たち。もうお酒が回つてこるらしく、みな一様にテンションが高い。

私も席について今までの話に花を咲かせた。

私にも楽しくなる程度に酔いが回つてきたときにその話は突如として友人の口から発せられた。

「そりそり、美保知つてた？坂間つてさあ

「え」

どきりとして一気に酔いがさめた。10年前チョコレートを渡して振られた、ってことはばれてないはず。だつて逃げ出したあのあと私は引っ越ししたのだから。

でもそのあと彼がどうなつたのか知らない。

胸の鼓動をどうにか抑えようとしながら平然とどうかした？なんて聞き返す。予想してたのは彼が良い職についていた、とかもう結婚したとか。最悪病気にかかっているということぐらいのものだった。だからこそ次の言葉には目を開きすぎて落ちるかと思つた。

「坂間つて美保のこと好きだつたらじこよ?」

「は・・・?」

意味がわからなかつた。だつて、彼は私のチョコレートを拒否した  
はづで。

あれ?

どういひこと?

「ん? 美保? 顔色悪いけど?」

「・・・ちょっと酔つちゃつたみたい」

「やだ大丈夫? これから一次会行くらしいけどいける?..」

「ううん・・・ごめん、帰るね」

ずきずきと痛み始めた頭を振つて私は同窓会を抜け出した。

駅に行く途中、あまりの寒さに耐えきれずに暖かい飲み物を買おつ  
と公園内の自販機に寄つた。お金を入れてふと明るい光に照りされ  
た自分の白い息を追つた。

見上げた冬の夜空は綺麗で思わずほう、と息を吐いたその時待てよ  
木田、と私を呼ぶ懐かしい男の声があつた。  
記憶の中の彼よりも低い、でも彼の声。

振り返ると坂間がそこにいた。

「なんで・・・?」

「いや、佐藤たちから木田が帰つたつて聞いて、慌てて追つてきた」

にしてもさつむいなーとマフラーに首をうずめる彼はひとつ年を

取つてけれど面影は変わらなかつた。

ほれ、と坂間は勝手にボタンを押して暖かいコーヒーを私に押し付けた。

「これじゃない」

「じゃあ紅茶か?」

「ほつとかりんれもんが良かつた」

「相変わらず甘党だな」

くすり、と坂間は笑つて長い指を出して今度は間違いなくほつとりんれもんのボタンを押して私に差し出した。

私はほつとかりんれもんを受け取るとコーヒーを坂間に差し出した。なんとなくそのまま近くのベンチに座つて寒さを忘れたようにぼけつと並んだ。

「懐かしいな」

ふいに坂間が言った。

「まあ昔よくやつてたね。つい寝ちやつたり」

「でつい真っ暗になるまで学校に取り残されて鍵閉められたつけ」

「そうそう、で先生に頼んで開けてもらつて」

「怒られたよなー。なんでこんな遅くまでこいるんですかって

「しょうがないよねえ寝ちゃつたんだから」

一人してくすくすと笑つてふと沈黙が訪れた。  
坂間が俯いて缶コーヒーをいじる。

「なんでなんも言わなかつた?」

「引っ越し?」

「やうだよ」

ぶつかりまつに坂間が言つ。そしてまっすぐに私の田を見据えてきた。

暗がりの中の坂間の田は自動販売機の光を反射して危険なように思えて私はつこと田をそらした。

「別に」

「別にじゃねえよ。お前どれだけ俺が後悔したと……」

「だつて！」

声を荒げた坂間を制すように私も鋭い声をあげた。

そんな坂間を見たくなかつた。なんて我がまま。

それに

「・・・言えるわけないじゃない」

「なんで」

「あんたに言えるわけないじゃない。否定されつけられたんだから」

「は？ 否定？」

「チヨコ、いらないうつていつた！」

子供のような言い方だと分かつてゐる。子供の喧嘩のような理由だと分かつてゐる。

けどその言葉は充分私を傷つけた。一番好きだったチヨコレートが嫌いになるほどに。一番好きだった人から遠く距離をとらなくなるほどに。

10年という長い年月が経たなければきっと坂間と会うことがなんてできなかつた。

坂間は私を覗き込むことを止めてそれは悪かつた、と呴いた。

私は目を開きすぎて涙がぽろぽろ出てきた。冬は乾燥している。坂間が黙つてティッシュを差し出してくる。ここはハンカチだろ、と突つ込みたいがあまりの坂間らしさに私は少し笑ってしまった。

「しょうがないだろ、俺はチョコレーート食べられないんだから」「は？あんだけ他の女子からチョコもらつておいて？」

「あれは兄に、つて奴だったからいいんだよ。知ってるだろ？俺の兄貴。生徒会長ですごくモテてた」

「え、あれ坂間の兄だったの？」

「・・・知らなかつたのか」

坂間は複雑な顔をした。で急にはは、と笑いだした。

「なんだよ。あれ、兄貴宛じゃなかつたのかよ・・・」「は？え？どういう意味？」

「察してくれよ。自分で恥ずかしいと思つてるんだ」「ごめん私どつちかというと馬鹿だから」

「試験の前はヤマ掛けてたしな」

「そうそだから答え教えてよ」

坂間は勝手に自分で考えろと言つて伸びをした。

考へても分からぬから聞いてるのに、と私は唇を尖らせた。

坂間はそんな私の姿を見て笑つて思い出したように鞄の中から白い封筒を出した。

「そうやつ、これお前に渡さうと思つてたんだ」「何よこれ

「結婚式の招待状。俺のな

「へえ」

「なんだ、おめでとうつていつてくれないのか？」「はいはいおめでとうおめでとう。相手は？」

「会社の同僚。いい娘だよ」

「ふうん・・・式の日が楽しみだわ」

「おう、楽しみにしてけ。せいぜい楽しませてやる

にやりと笑う坂間。意外なほどに痛みはなかった。そのことが嬉しくて、私は悪戯っぽく笑つて冗談として坂間に聞いてみた。

「ねえ、私のこと好きだったって本当？」

坂間は一瞬キヨトンとして「あらは悪戯がばれた子供のよつな顔をして隠しに笑つていた。

「5年前までな」

送るという坂間の提案を彼女が妬くじゃない、妬かれるのはごめんよ、といつて追い返した。

人通りがあるところだつたし、最寄り駅まで何事もなくついた。あとはタクシーを拾つて帰るだけだとタクシー乗り場に向かつていだ時だつた。急に腕をひかれた。

すわ、人攫いかと怯えながら振り返るとそこにいたのは畠山。何とも言えない顔で私をつかんでいる。

人攫いじゃなかつたことにほつとすると畠山に不信感が湧いてきた。

「なんで私の最寄り駅にいるのよ。ていうか痛いみたい！放してつて！」

「・・・会つたんですか

「はい？」

私は眉をしかめた。今日だけに閑わらずいろんな人に会つてている。主語を外されると何を言いたいのかよくわからない。

もう一度聞き返すと畠山は表情を固めたまま硬質な声を出した。

坂間先輩に、会つたんですか

私は会つたわよ、と答えた。同窓会なんだから昔の同級生に会つのは当たり前でしょ?と。

途端に私を拘束する畠山の手がだらんと外れた。意味がわからない。と、そうやつ、畠山に渡すものがあつたんだった。

そう私がいうとぴんと畠山が固まつた。やっぱり意味がわからない。そして私が鞄から取り出したのは白い封筒。私も坂間から貰つた結婚式の招待状だ。

坂間から、といつて渡すとけよつとじょげてでも素早く封筒を開けて中の内容を流し読みした。

・・・なんでいつもどおりになつてんのこいつ。

やつぱり畠山はよくわからない。なんで斎藤ちゃんはこんなのが好きなんだろうか。

そういうえば斎藤ちゃんはどうなつたんだろう。慌ててメールの有無を確認してみる。

・・・あつた。斎藤ちゃんから一通。

件名はやりました!で可愛い絵文字。どう見ても成功したとしか思えない。

ぞく、と肺がまた痛くなつた。急にいっぱい冷たい空気を肺に入れすぎたんだろうか。

寒さで震える手でメールを開くと可愛らしい絵文字に囲まれて課長と付き合つことになりました!という喜びのメッセージ。  
田が一瞬点になつたのを感じた。

「も、もしもし斎藤ちゃん?今メールみたんだけど...」

『あ、木田さん! そなんですよOKくれました! もう嬉しくて私

どついたらいいか……』

「おめでとう！……つていうか相手がそっちの課長って今初めて知ったんだけど……」

『だから畠山君じゃないつて何回もいったじゃないですか——』

『いや噂でそうなつてたからてつきり……』

『木田さんは私と噂どつちが大切なんですかもう!』

『わわわごめん!あと明日詳しい話おねがい!』

『もう……こちらこそ話したくて話したくて!明日またお昼一緒にしましょ!』

『うん!ゼひ!じゃあね!』

ブツツと通話を切ると田の前にいるのは怪訝な顔をした畠山。そういえばここにはなんでココにいるんだろう。

そんな私の感情を感じ取ったのか、畠山はちょっと気になつてですね、と拙いいわけを始めた。

まあいいか。今の私はちょっと気分がいい。

「ねえ、そこに美味しいって評判のチョコレート屋があるんだけど明日行つてみない?」

『え……?ああはい、ゼひ!』

ちょっと遅いけど義理チョコでもあげようか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9588q/>

キレイキレイもスキのうち

2011年2月19日20時48分発行